2023年度
全学統一入学試験

国　　語

【 注 意 事 項 】

(1) 試験監督の指示があるまでは、問題冊子を開いてはいけません。
(2) 解答時間は60分です。
(3) この問題冊子は17ページ、問題は【一】から【二】までです。
(4) 解答用紙は1枚です。
(5) 乱丁・落丁、印刷不鮮明などがある場合、手を挙げて試験監督に申し出なさい。
(6) 解答用紙には、必ず受験番号・氏名を正確に記入し、受験番号マーク欄にも受験番号を正確にマークしなさい。
(7) 解答はすべて別紙の解答用紙の所定欄にマークしなさい。
(8) 試験開始から終了までの間は、試験教室から退出できません。
(9) 問題冊子および解答用紙は室外に持ち出してはいけません。

【二】次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。なお、設問の都合で本文の段落に1～14の番号を付してある。

1 ここで、アーレント(注1)がライプニッツ(注2)に倣って真理を「理性の真理」と「事実の真理」の二つに分類していたことを確認しておこう。「理性の真理」とは2＋2＝4などの数式や「地球は太陽のまわりを回転している」などの物理的法則のように議論の余地なく、誰もがそれを真と認めることができるような「真理」（客観的命題）である。他方、「事実の真理」は「一九一四年八月四日の夜、ドイツ軍がベルギー国境に侵入した」といった歴史的事実や現在および過去の出来事に関する「真理（真実）」を指す。

2 この二つの真理のうち、「理性の真理」は議論の余地がなく、誰にとっても等しい真理であるのに対して、「事実の真理」は「つねに他の人々に関連して」おり、「多くの人が巻き込まれている出来事や環境に関わり、目撃によって立証され、証言に依存する」ものである。この性格ゆえに、「事実の真理は本性上政治的である」とアーレントは言う。

3 アーレントにとって政治的領域とは複数的な意見の交換（公共的な討議）が行われる場であったが、その領域において「事実」と「意見」は相互に支え合う関係にある。「事実と意見は区別されねばならぬが、互いに敵対するものではなく同じ領域に属している」のであり、「事実は意見の糧であると同時に、意見は「事実の真理を尊重するかぎり正当でありうる」。言い換えれば、「理性の真理が哲学的思弁(i)の糧であるように、事実の真理は政治的思考の糧である」ということになる。

4 ここでも、アーレントが「事実と意見は同じ領域に属している」ということは、一見すると、意見と同様に事実もまた複数的な次元を持ちうると彼女が信じていたかのような印象を与えかねない。さらに続けてアーレントは次のようにも述べている。

> しかし、そもそも事実は意見や解釈と無関係に存在するであろうか。歴史家や歴史哲学者は代々、解釈なしに事実を確認することが不可能であると立証してこなかったであろうか。というのも、事実はまず最初に単なる偶然の出来事のカオスから拾い上げられ（事実のデータは決して選択の原理とはならない）、ついで物語にはめ込まれねばならないが、物語はあるパースペクティヴにおいてのみ語られうるものであり、しかもパースペクティヴは元の出来事からは導出されないからである。

5 「事実の真理」に関するアーレントのこうした記述は、「事実や出来事の連なり」が観点の持ち方次第で「物語」としていかようにも語られうるかのような印象を与える。こうした言明は、歴史的事実が必ずしも一つには限らず、歴史には様々な捉え方や語り口がありうると主張する歴史修正主義者の主張とも近しい立場にあるように映る。社会科学のなかでも、歴史解釈をめぐっては「物語の複数性」をテイショウ(ア)する議論があるが、ネット右翼の言説に詳しい倉橋耕平はこのことを次のように説明している。歴史は複数あり、それぞれの視点から多元的に作られているという主張は、一方では文化相対主義を加速させ、他方では複数

的な立場からの歴史認識を巡る政治をソクシン(イ)させた。しかし、ここに「社会構築主義の罠」とでも呼びうる逆説がある。すなわち、歴史が社会構築的な物語であるならば、ヒルガエ(ウ)って歴史修正主義もまた、事実・出来事を前提としない物語として等価に検討すべきだという論理的帰結をもたらすという罠がそれである。

6 アーレントによれば「事実の真理」は人々の目撃や証言に依拠するために改変されやすく脆い性格をもち、為政者が強大な政治的権力をもてば、歴史的事実を抹消することすらも不可能ではない。例えば、「一九一四年八月四日の夜にドイツ軍がベルギー国境に侵入した」という歴史的事実を記録から抹消することは決して容易ではない。そこには「歴史家の気まぐ(ii)れ以上のものが必要とされよう」。とはいえ、「このような権力独占が決して考えられないわけではないし、（…）権力の利害がこのような事柄に関して最終的な発言権を持った場合、事実の真理の運命がどうなるかは想像に難くない」。そして「事実や出来事はいったん失われるならば、理性がいかに努力しても永遠にそれらを取り戻せないであろう」。

7 A こうした記述を踏まえてみるとき、「事実の真理」をめぐるアーレントの記述は、今日における歴史修正主義者たちの論理を予見するものだったと評価することができると同時に、他方では「歴史にたった一つの事実などない。歴史には様々な語り口がありうるのだ」といった相対主義的な歴史観とも呼応(iii)し、それがひいては「歴史とは物語であり、それぞれの国に固有の物語＝歴史がありうる」といった歴史修正主義的あるいは右翼的な歴史観に道を開いてしまうキケン(エ)性を持っていたと捉えることもできる。言うまでもなく、B アーレントが歴史修正主義を擁護するつもりがなかったことは明らかである。しかし、事実と意見が同じ領域に属すると論じるアーレントの思想は、ややもすると、歴史修正主義やポスト真実主義的な主張と呼応してしまうキケン性をもっているのではないか？

8 しかしやはりそうではない。アーレントは次のように明言しているからである。

> しかしだからといって、そのことが事実の事柄が現実に存在することを否定する論拠となるわけではなく、また事実と意見や解釈との境界線を曖昧にすることを正当化したり、歴史家が好みのままに事実を操作する口実(iv)として役立ちうるわけではない。たとえ各世代がそれ自身の歴史を書く権利をもつことが認められるとしても、それ自身のパースペクティヴにしたがって事実を並び替える権利をもつことが認められるわけではない。われわれは事実の事柄それ自身に手を触れる権利を認めないのである。

9 アーレントは、歴史的事実が語り手によって好き勝手に語られ、物語化されて良いと認めていたわけでは決してない。「われわれは事実の事柄それ自身に手を触れる権利を認めない」と断言していることから、それは明らかであろう。前にも、彼女は「事実は意見の糧」であると同時に、「意見は（…）事実の真理を尊重するかぎり正当でありうる」と述べていたのであって、同じ政治的領域に属するとはいえ、意見と事実

は同じ解釈的次元に属しているわけではない。

10 アーレントは、C「事実の真理」も揺るぎなく「真理」なのであり、「理性の真理」と同様に、「それ自身のうちに強制の要素をもっている」と言い切っている。「私は理性の真理と反対に事実の真理は意見と対立しないと述べたが、これは半面の真理にすぎない。すべての真理は、さまざまな種類の理性の真理ばかりでなく事実の真理も、妥当性を主張する仕方において意見と対立する。真理はそれ自身のうちに強制の要素を伴っている」。

11 「三角形の三つの角の和は正方形の二つの角の和に等しい」とか「地球は太陽のまわりを回転している」といった「理性の真理」と同様に、「一九一四年八月にドイツはベルギーを侵略した」といった「事実の真理」もまた、「ひとたび真なるものとして了解され、そう宣言されるや、合意、論争、意見、同意に左右されないものになる」のである。「なぜなら、その言明の内容は説得の性質ではなく、強制の性質をもつのであるからだ」。このようにして、アーレントは「事実の真理」が目撃や証言などに依拠する不安定さをもつことを認めながらも、最終的には「事実の真理」もやはり真理の一部として、「人間の合意や同意を超えた」確固たる確かさをもつものだと明言する。「真理を扱う思考やコミュニケーションの様式」は、「他者の意見など考慮に入れない」のであり、「意見の交換」は真理に寄与(v)しない。

12 こうして「事実の真理」に対するアーレントの議論は二つの側面をもっている。アーレントは一面ではそれが目撃や証言に依拠する不確かさを持つことを認めつつも、もう一面では、それが最終的には人間の意見や論争に左右されない真理としての強靭さをもつ、とも述べているからである。言い換えれば、「事実の真理」は政治的な争い事に巻き込まれやすいものだが、最終的にはそれはやはり政治的な討論とは区別される真理としての強制力をもつのだと彼女は考えていたのである。

13 事実はあくまで一つであって、複数の事実が存在するわけではない。その点については、アーレントは確固たる信念をもっている。たとえ「事実の真理」を短期的に偽ることができたとしても、長期的に見れば、それを偽り続けることはできず、いつかは「真実」が明らかになるはずである。ゆえに、アーレントも、多くのポストモダニストと同様、単なる相対主義者でもなければ、普遍的な真理への信念を失ったニヒリストでもない。アーレントがその意義を強調した「意見の複数性」は、あくまで「事実の真理」に対する共通の認識という土台のうえで実現されるものでなければならず、複数的な解釈は一つの事実に対してなされるものでなければならないのである。

14 「政治における嘘」でも次のように述べられている。「嘘つきは聴衆が聞きたいと思っていることや聞くだろうと予期していることを前もって知っているという非常に有利な立場にいるので、嘘はしばしば現実よりもはるかに真実味があり、理性にアピールする」にもかかわらず、「正常な状態では、現実に取って代わるものがないことから、嘘つきは現実によって打ち負かされる」。すなわち、D嘘つき（政治家）はずっと人々を騙し続けることはできない。ほとんどの場合、長期的に見れば、嘘は現実によって反駁される。それは、「経験豊富な嘘つきの提供する虚偽の織物がいかに大きかろうとも、それは、たとえ彼がコンピュータ

の助けを借りたとしても、巨大な事実性をオオい尽くすほど大きいということは決してないだろう」からである。(オ)

（百木漠『嘘と政治　ポスト真実とアーレントの思想』による）

（注1）アーレント――ドイツの哲学者、思想家。

（注2）ライプニッツ――ドイツの哲学者、数学者。

＊　問題作成の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問1　傍線部（ア）～（オ）に相当する漢字を含むものを、各群の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 1 ～ 5 。

（ア）テイショウ

① 文部省ショウカを歌う
② 学問をショウレイする
③ 夕食にショウタイする
④ X線をショウシャする
⑤ ショウサイな報告を受ける　1

（イ）ソクシン

① オクソクで物を言うな
② 実態はホソクしがたい
③ ソクサイに過ごす
④ ソクブツ的な描写
⑤ 語尾がソクオンに変わる　2

（ウ）ヒルガエって

① ホンリョウを発揮する
② ボンサイの手入れをする
③ 運命にホンロウされる
④ ボンピャクの作品に成り下がる
⑤ 資金集めにホンソウする　3

（エ）キケン

① テッケンを振るう
② ケンモンに引っかかる
③ ケンソウな面構え
④ ケンヤクを心がける
⑤ 横領のケンギがかけられる　4

（オ）オオい

① フクアンを示す
② フクヘイに優勝をさらわれる
③ 道路のフクインをひろげる
④ フクスイ盆に返らず
⑤ 売上金をチャクフクする　5

問2　傍線部（i）～（v）の本文中における意味としてもっとも適切なものを、各群の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 6 ～ 10 。

（i）「思弁」 6

① 証拠を上げることなく漠然と真理を捉えようとすること
② 他者に頼らずに自らの力だけで真理を捉えようとすること
③ 経験を介さずに思考によって真理を捉えようとすること
④ 漫然とではなく目的を持って真理を捉えようとすること
⑤ 直観的にではなく実践的に真理を捉えようとすること

（ii）「気まぐれ」 7

① 積極的ではなく無意識のうちに行動すること
② その時々の思いつきによって行動すること
③ 人から刺激を受け感情的になり行動すること
④ 能動的ではなく受動的に行動すること
⑤ 他者のことを考えて柔軟に行動すること

（iii）「呼応」 8

① 互いの欠点を取り上げ、批判してしまうこと
② 互いのことを考え、譲り合うこと
③ 互いに牽制し合い、力を相殺してしまうこと
④ 互いの主張を認めて、妥協すること
⑤ 互いに気脈を通じて、一つの行動をとること

（iv）「口実」 9

① ためらいながらも言ってしまう理由
② 思わず口をついて出るいい加減な理由
③ 論理的ではないが説得力のある理由
④ 胸を張って公表することができる理由
⑤ 言い訳のためにかこつける理由

（v）「寄与しない」 10

① 確固とした基盤を持つことがない
② 必ずいざなわれるとは限らない
③ 簡単には到達することができない
④ 貢献し、役に立つことがない
⑤ 無条件につき従うことはない

問3　傍線部A「こうした記述」とあるが、どのようなことか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 11 。

① 事実とは、歴史哲学者によって証明されてきたように、意見や解釈と無関係に存在するものではなく、「事実の真理」は、さまざまな捉え方や語り口が存在するものであるということ。

② 事実とは、混沌たる出来事の中から、ある一つの物の見方によって語られた物語で切り取られたものであり、「事実の真理」は改変される可能性をもつ、崩れやすいものであるということ。

③ 事実とは、為政者が強大な政治権力をもてば、抹消することも不可能ではなく、「事実の真理」は事実や出来事を前提とせずに物語り、構築することができるものであるということ。

④ 事実とは、人々の目撃や証言に依拠しているため、語る者によって同じではなく相対的なものであり、「事実の真理」は語り手によって恣意的に語られ、物語化されるものであるということ。

⑤ 事実とは、最初から確固として存在するものではなく、社会の中で構築されて初めて存在するものであり、「事実の真理」は必然的に複数的な次元を持ちうるものであるということ。

問4　傍線部B「アーレントが歴史修正主義を擁護するつもりがなかった」とあるが、どのようなことか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 12 。

① 歴史は相対的なものであり、それぞれの立場や考え方により構築されるものであるが、長期的には真理的なものに安定していくという考えに、アーレントは同意するつもりはなかったということ。

② 歴史は確定的なものが存在せず、そのときそのときの歴史家が自らの思うままに自らが構想した物語にしたがって作っていけばよいという考えに、アーレントは賛成するつもりはなかったということ。

③ 歴史は権力者が自らの権力を正当化するために物語るもので、権力者が変われば、そのつど歴史も変わっていくものであるという考えに、アーレントは反対するつもりはなかったということ。

④ 歴史に新しい事実や証言が出てきたら、従来のものを改めなければならない不安定さがあるが、そのことで正しい歴史ができるという考えを、アーレントは支持するつもりはなかったということ。

⑤ 歴史は唯一無二なものがあるわけではなく、様々な語り口をもつという歴史観の下、それぞれの国には固有の歴史が存在するという考えを、アーレントはかばい守るつもりはなかったということ。

問5　傍線部C「『事実の真理』も揺るぎなく『真理』なのであり」とあるが、これはどういうことか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 13 。

① 「事実の真理」は、人間の意見や論争によって影響を与えられたり動かされたりするものではなく、強制力をもって、あくまでもひとつだけ存在するものであるということ。

② 「事実の真理」は、意見を尊重するかぎり正当であると認められるものであるが、意見とは同じ解釈的次元に属しているわけではなく、あくまでも真理は真理であるということ。

③ 「事実の真理」は、最初から絶対的なものとして存在しており、人間の合意や同意を越えた確固たるものとして、物理的法則のように規則性を持っているということ。

④ 「事実の真理」は、いったん宣言されるやいなや、誰もがそれに従わざるを得なくなるという人々を強制するだけの絶大なる力を持つようになるということ。

⑤ 「事実の真理」は、政治的な争いに巻き込まれやすいものではあるが、政治的討論とは別次元にあるため、政治的思考とは関係なく絶対的に存在しているということ。

問6　傍線部D「嘘つき（政治家）はずっと人々を騙し続けることはできない」とあるが、それはなぜか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 14 。

① 嘘は、経験豊富な者によって巧みにつかれるため、短期的には聞く者の理性に訴えかける力を持ってはいるのだが、長期的にはやはり「理性の真理」にかなうものではないから。

② 嘘は、聴衆が聞きたいと思っていることをあらかじめ知ったうえでついているので、短期的にはリアリティがあるように思えるが、長期的には虚無的な気分に陥らせることになるから。

③ 嘘は、絶対的な権力を持った者がついた場合、短期的にはそれだけで信用されるものであるが、長期的にはその権力者の力も衰退し、化けの皮が剥がれることになるから。

④ 嘘は、短期的には「事実の真理」を偽ることができ、真実味があるように見えたとしても、長期的には現実に取って代わることができず、現実に反論されてしまうことになるから。

⑤ 嘘は、コンピュータを用いるなどして巧妙についた場合には、短期的には信用されることもあるが、長期的には人々の論争を経て真なるものが了解されることになるから。

問7　この文章の構成に関する説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 15 。

① 1段落から7段落までは、「事実の真理」と「理性の真理」を対比させながら、「事実の真理」に対する一般的な捉え方がどのようなものであるかをわかりやすく説明している。

② 5段落では、4段落で引用したアーレントの記述を、ネット右翼の言説に詳しい倉橋耕平がどのように解釈したかを、歴史修正主義者の考え方と関連させながら説明している。

③ 7段落では、1段落から6段落にかけての議論から逸脱した問題が提起され、その疑問に対して、8段落でアーレントの言葉を引用しながら答えていくという展開になっている。

④ 12段落で、8段落から始まった、「事実の真理」に対するアーレントのそれまでの議論とは異なった捉え方の説明をまとめ、アーレントの「事実の真理」に対する最終的な考えを提示している。

⑤ 14段落では、「政治における嘘」を取り上げることで、12段落で説明した「事実の真理」の捉え方の二面性が、政治の世界で顕著に表れているということを実証している。

問8　次のa～eの中で、本文の内容に合致するものには①を、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。解答番号は 16 ～ 20 。

a　「事実の真理」は目撃や証言に依拠するため不確かさをもつが、最終的には揺るぎない真理性をもつものであり、真理としての強靭さを発揮するとアーレントは考えている。しかし、アーレントは真実味のある嘘を政治においては用いるべきだとしている。 16

b　複数の事実が存在するわけではなく、あくまでも事実は一つであり、たとえ「事実の真理」を短期的に偽ることができても、長期的には「真実」が明らかになるとアーレントは考えている。ゆえにアーレントは単なる相対主義者であると言うことはできない。 17

c　「太陽は地球のまわりを回転している」というのが「理性の真理」であるのと同様に、「一九一四年八月ドイツはベルギーを侵略した」というのも「事実の真理」である。しかし、「事実の真理」は「理性の真理」ほど堅固性を持っているわけではない。 18

d　多くの人が巻き込まれている出来事や環境に関わり、目撃によって立証されたりする「事実の真理」は、本性上政治的なものである。よって、事実は意見と同じ政治的領域に属していると言うことができる。 19

e　「事実や出来事の連なり」は観点の持ち方次第で、どのようにでも物語ることができるとアーレントは考えている。これは、歴史的事実は一つだとは限らず、複数存在しているということを意味するものである。 20

【二】次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。なお、設問の都合で本文の段落に1～9の番号を付してある。

1　一九九〇年代に急速に力を失ってしまったとはいえ、ポストモダン建築は、モダニズムへの強烈な異議申し立てであったことは疑いようがなく、それを支えた議論も、モダニズムに劣らないほどの分厚さがあった。歴史主義的で記号論的な建築というポストモダン建築の通俗的なイメージは、むしろそこに至るまでの議論を矮小化してしまっている側面が強い。そこで積み重ねられた議論を追いかけるにはあまりに紙幅が不足しているが、その片鱗に少しでも触れるためには、まずはポストモダン建築が自身と対置させたA<u>モダニズム建築</u>について理解する必要がある。とはいえ、建築におけるモダニズムは、ポストモダニズムと同様に、一枚岩のように理解できるものではない。しかしポストモダン建築は、モダニズムからの脱却を<u>標榜</u>(i)することで自身を定位しようとしたのだから、その過程で描かれたモダニズム像には、ポストモダン建築が目指したものが多分に投影されていると考えてよいだろう。

2　この意味での建築におけるモダニズムは、西洋世界で大きく発展した科学的方法を背景に持ち、理念的で方法論的な意識に強く<u>立脚</u>(ii)した建築の体系であると捉えることができる。そのためモダニズムは、建築の思弁的な水準こそを第一とし、具体的な水準に位置づく手仕事が生む喜びなどといったものを重視しない。また、住宅をはじめとする大衆のための建築を大量に必要としていた近代に生まれたモダニズムは、生産の合理化を是としたため、機械力の導入による建築生産の工業化を積極的に推進した。モダニズムの建築を特徴付ける、装飾を排した直線的なデザインは、機械を肯定し、人間の手仕事を排除しようとした結果である<u>(ア)</u>といえるが、こうした特徴も、モダニズムが思弁的な方法に極端にヘンコウしていたことをよく表している。またモダニズムの建築は、方法論的な意識に強く立脚していたがため、建物全体としての無矛盾性に固執し、したがってそのあり方は一義的であった。一義的で裏表のない建築は、往々にして普遍的であることも志向するが、モダニズムは普遍性の埒外にある建築の個別的な要素も大胆に排除していった。こうした個別的な要素には、建築の歴史性や地域性も含まれるが、B<u>モダニズムの建築が貧困なボキャブラリーしか持ちえなかったのは、その意味では当然の帰結だったといえる。</u>

3　こうしたモダニズムの建築が持っていた一義性を、早い段階で明確に否定したのは、建築家のロバート・ヴェンチューリである。ヴェンチューリは、一九六六年に『建築における多様性と対立性』と題した著書を刊行しており、ここで建築に複雑性と矛盾を持ち込むことの重要性を説いた。ヴェンチューリは、さらに一九七二年に、デニス・スコット・ブラウンと協働して『ラスベガス』を著しているが、ここでヴェンチューリは、ある印象的なたとえを用いて、モダニズムの無矛盾性への固執を批判している。ふたりは、モダニズムの建築が「空間、構造、プログラムといった純粋に建築的な要素を声高に組織した」のと同時に、「明白な象徴を用いることや、軽薄なアップリケのような装飾を拒否」した結果、建物全体がゆがみ、「ひとつの大きな装飾と化してしまった」と断じる。彼らはこうしたモダニズムの建築を「あひるの格好をし

たドライブ・イン」にたとえ、それよりは「空間と構造のシステムがプログラム上の要請に無理なく従い、装飾が独立してそれらに取り付けられている」看板建築のほうが好ましいと論じた。看板のような装飾が独立して取り付けられている建築とは、いうまでもなく矛盾を肯定することで、建築の構造などとは無関係な大衆の嗜好を表す象徴的な記号を素直に受け入れた建築を意味しており、こうした建築こそが大衆とのコミュニケーションを可能にすると彼らは考えたのである。

4　ただし(C)ヴェンチューリたちの考えは、ただちに諸手を挙げて受け入れられたわけではない。その葛藤をよく表すのが、一九七〇年代前半のアメリカ建築界の構図ともいわれた「ホワイト派」と「グレイ派」の対比である。ヴェンチューリを含むグレイ派と呼ばれた建築家たちは、批評家やメディアによって、レイト・モダニズム的なホワイト派の建築家たちと対立させられ、大きな論争が巻き起こったのである。このホワイト派VSグレイ派の構図に対して、わかりやすい二元論的な見立てを持ち込んだのが、建築家のロバート・スターンであった。スターンは、純粋で明快な形態を求めるホワイト派は「ヨーロッパ的・理想主義的」で「排他的」であり、幅広いカテゴリーからさまざまな形態要素を引用するグレイ派は「アメリカ的・実利主義的」で「包摂的」であると論じた。この見立てはグレイ派に有利に働き、結局のところ、ポップなアイコンばかりではなく、歴史的言語をも包摂するグレイ派の理論が優勢になっていくのであった。その後、歴史主義的・記号論的な建築が勢力を拡大していったが、ようするにポストモダン建築とは、モダニズムが排除した歴史性や大衆性を包摂し、建築が本来備えていた豊かな要素を回復させようとする動きに源流を持つのである。

5　ただし、歴史主義的な建築が(イ)リュウセイを極めるにつれ、ヨーロッパやアメリカでも、歴史主義に反対する声が大きくなっていく。しかしそこで展開されたのは、流行を追いかけるように歴史的形態を取り込むのではなく、地域性や場所性を受け入れようといった主張であり、歴史主義への反対意見もまた、モダニズムが排除したものの包摂を目指す点では変わりがなかった。その意味でポストモダン建築は、特定の年代に見られる特殊な建築というわけでは決してない。ポストモダン建築は、連綿と続く議論のなかに連続的に位置付いているのである。そして、こうした過去の議論との連続性は、ヨーロッパやアメリカばかりではなく、バブル経済という特異な時期に最盛期を迎えた日本のポストモダン建築にも見られるものであった。

6　一九七〇年代からの連続性をある程度は保っていた日本の現代建築は、しかしポストモダン建築の流れが(iii)袋小路に入ってしまった一九九〇年代後半以降、まったく別の潮流に取って代わられたように見える。一九九〇年代後半から二〇〇〇年代の日本の建築を牽引した建築家としては、何といっても妹島和世の名前を挙げなくてはならないが、妹島の建築に典型的に見られるように、これ以降の日本の建築は、構成の面では建築それ自体がダイアグラムであるかのような単純明快さを志向し、また空間的な現れの面では抽象性と現象的な表現を志向した。そこに(iv)通底しているのは、ポストモダン建築がまとっていたような意味論を徹底的に漂白しようとする態度である。ただし、二〇〇〇年代の日本の建築に強く認められるこうした志向が、何に起因していたのかはよくわからな

い。そこには、歴史主義的な建築言語や難解な説明などといったジャーゴンで装飾されていたポストモダン建築に対する拒否感もあったのだろうし、グローバル経済の進展やインターネットの登場によって急速にフラット化していく世界に同調する気分もあったのかもしれない。いずれにせよ、この頃の日本の建築は、それまでの建築とは対照的な方向に進んでいたのである。

7　この方向性に大きなキドウ(ウ)修正を要請したのは、二〇一一年(D)に起きた東日本大震災であった。この震災は、被災した範囲が都市部にとどまらず、漁村部の被害もジンダイ(エ)であったことや、被災範囲が巨大であり、首都圏が被った影響も小さくはなかったことなどが特徴である。そのため、被害が大きかった地域との連帯を望む意識が大きく広がり、発災直後から、東京をはじめとする各地の建築家が、支援がいきわたらない漁村部などで活動をはじめる例が多発した。そこで建築家は、被災地の歴史や地域性を尊重するとともに、被災者の声に耳を傾け、行政を含む関係者との複雑な調整を重ねながら、限られた地域資源を活用して建築をつくるという課題(v)に向きあうことになったのである。

8　被災地での建築家の経験は、実際に日本の建築の主題も大きく更新するものであった。一例として、金沢21世紀美術館で二〇一四年から二〇一五年にかけてカイサイ(オ)された「3.11以後の建築」展を見てみよう。この展覧会は、主として被災地での建築家の活動に焦点をあてたものであったが、そこで掲げられた「エネルギーを考える」「使い手とつくる」「地域資源を見直す」「住まいをひらく」「建築家の役割を広げる」といったサブテーマは、二〇〇〇年代にはあまり顧みられることがなかったものの、日本の建築家が現在進行形で取り組んでいる課題であるといっても違和感はないものばかりである。加えて、ここで挙げたテーマは、一九七〇年代の小住宅が提出した問題群といくつかの点で共通していることも指摘しておきたい。同様の指摘は建築家の北山恒によってもなされているが、いずれにせよ現在の日本の建築が、多様な要素を包摂する方向へとふたたび舵を切っていることは間違いない。

9　包摂を目指す現在の日本の建築には、したがってポストモダン建築との類似性も認められる。記号論的な操作や様式的な言語こそ見られないものの、ヴェンチューリが試みたように、多様で、ときに矛盾するような要素を、ひとつの建築のなかで共存させようとする態度が、いまではめずらしいものではなくなってきているのである。また、このような動きは日本の建築界だけに限られるものではないことも特筆しておくべきだろう。建築家の平野利樹は、トランプ政権下で起こったひとびとの分断や、デジタル・テクノロジーの発展によって多種多様な要素を容易に扱うことが可能になったことなどを背景として、アメリカの若手建築家のなかに、雑多な要素の集積によって建築をつくろうとする「新コラージュ主義」とでも呼べる傾向が生まれていることを報告している。なかでも、99セントショップやリサイクルショップで集めたカラフルながらくたを組み合わせて形態をつくろうとするアンドリュー・コバックや、建築家によるドローイングの断片や既製の住宅部品を引用するヒメネス・ライの建築は、表層的なデザインの水準でもかつてのポストモダン建築へと近づいており、たいへん興味深い。ポストモダン建築は、各所でふたたびリアリティを高めているといっても構わないのである。

（門脇耕三「ポストモダン建築とは何だったのか　ポストモダニズム以前、ポストモダニズム以後」による）

＊　問題作成の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問1　傍線部（ア）～（オ）に相当する漢字を含むものを、各群の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 21 ～ 25 。

（ア）ヘンコウ

① 日本各地にヘンザイする
② 噴火で山がヘンヨウした
③ ヘンキョウの街に出かける
④ ヘンレイの品を届ける
⑤ 枝はキヘンの漢字である 21

（イ）リュウセイ

① 辞任をイリュウする
② リュウトウ蛇尾に終わる
③ リュウビを逆立てる
④ 会合がリュウカイになった
⑤ 筋骨リュウリュウの体 22

（ウ）キドウ

① キチにとんだ文章
② スウキな運命をたどる
③ 海外進出をキトする
④ 一定のキセキを描く
⑤ キジョウの空論に終わる 23

（エ）ジンダイ

① ジントウで指揮をとる
② お返事をいただければコウジンです
③ キョウジンに倒れる
④ ジンソクに対応する
⑤ この騒ぎはジンジョウではない 24

（オ）カイサイ

① サイゲンなく続く
② 矢のようなサイソク
③ フウサイがあがらない
④ チュウサイに入る
⑤ セイサイに描写する 25

問2　傍線部（i）～（v）の本文中における意味としてもっとも適切なものを、各群の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 26 ～ 30 。

（i）「標榜する」 26

① 自らの目印として心に留めておく
② 思考すべき方向性を定める
③ 主義主張を公然と掲げる
④ 現実的な対応策をとる
⑤ 実現達成を目指して行動する

（ii）「立脚した」 27

① 物の見方や考え方を示した
② 置かれた状況を把握した
③ 堅固な意思を貫いた
④ 強いこだわりを持った
⑤ 拠り所として定めた

（iii）「袋小路に入ってしまった」 28

① うまく機能せず、壊れてしまった
② 阻害され、別のものに変わってしまった
③ 方向性がつかめなくなってしまった
④ 円滑に運ばず、滞ってしまった
⑤ 分裂して、細かくなってしまった

（iv）「通底している」 29

① 本質的な問題が常に起こっている
② 広くて浅い関係性を作り上げている
③ 見えないところでつながっている
④ 基礎的な部分で物事が進行している
⑤ 誰も知らないうちに行われている

（v）「課題」 30

① 明るい未来の構築へとつながる問題
② 解決しなければならない問題
③ 今までは起こらなかった難しい問題
④ 到底実現できそうにない問題
⑤ 単純ではなく複雑に入り組んだ問題

問3　傍線部A「モダニズム建築」とあるが、これはどのようなところに特徴があるのか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 31 。

① モダニズム建築は、一枚岩的に行われるものではなく多様な方法を用いることによって、生産をより効率的に行い、より普遍性を持った近代的な建物をつくったところに特徴がある。

② モダニズム建築は、西洋で大きく発展した科学的な方法を背景に持つことにより、生産を工業化することによって、象徴的で記号論的な建築のスタイルを構築したところに特徴がある。

③ モダニズム建築は、歴史主義的思考を重視していたため、具体的な水準に位置づく人間の手仕事を軽視して、新しい生産方法を用いて、大衆のための建築をつくったところに特徴がある。

④ モダニズム建築は、方法論的意識が強く、抽象的な傾向を持つとともに、機械力を導入することによって、合理的に生産を行い、装飾を排した建物をつくったところに特徴がある。

⑤ モダニズム建築は、確固とした体系的な理論の構築をまず行い、その建築理論に基づき、生産を簡略化することによって、直線的なスタイルを持つ建物をつくったところに特徴がある。

問4　傍線部B「モダニズムの建築が貧困なボキャブラリーしか持ちえなかった」とあるが、それはなぜか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 32 。

① 一義的で裏表がなく明快であることを目指していたモダニズム建築は、方法論に強く固執しており、誰もが依拠できる絶対的な理論を構築しようとしていたから。

② 汎用性がある普遍的なスタイルを志向していたモダニズム建築は、個別的な一人一人の人間よりも社会全体を念頭において建物をつくろうとする傾向があったから。

③ 空間、構造、プログラムといった純粋に建築的な要素をできるだけ排除してつくられたモダニズム建築は、軽薄な装飾をまとった建物をつくることになったから。

④ ポストモダニズムと対置することによって自らを定位しようとしたモダニズム建築は、歴史性や地域性を排除して、画一的な建築を目指すことになったから。

⑤ 思弁的な水準を第一とする傾向を強く持っていたモダニズム建築は、複雑性や矛盾を排除することによって、あいまいさのない建築を志向していたから。

問5　傍線部C「ヴェンチューリたちの考え」とあるが、これについての説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 33 。

① 建築に象徴的な記号を素直に取り入れたヴェンチューリたちの考えは、一九七〇年代のアメリカの建築界をグレイ派とホワイト派に二分し、議論を巻き起こすことを意図するものであった。

② アメリカ的・実利主義的ではあるが包摂的でもあったヴェンチューリたちの考えは、アメリカにおいて歴史主義的な建築が勢力を拡大していたことを背景にしてうち立てられたものであった。

③ モダニズム建築が排除しようとした大衆性や歴史性を取り入れたヴェンチューリたちの考えは、積極的に賛意を得られたわけではないが、ポスト・モダニズムに源流を持つものであった。

④ 看板のような装飾が独立して取り付けられているような建築を主体的に評価するヴェンチューリたちの考えは、評論家やメディアなどにレイト・モダニズムだと揶揄されるものであった。

⑤ さまざまな形態を取り入れることなく純粋で単純明快な形態を目指していたヴェンチューリたちの考えは、建築が本来もっていた姿を回復するものとして評価されるものであった。

問6　傍線部D「二〇一一年に起きた東日本大震災」とあるが、これは日本の建築にどのような影響を与えたのか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 34 。

① 矛盾する要素をひとつの建築のなかに共存させるような無理をすることなく、住む人たちの声に耳を傾けた、人間らしい暮らしができる豊かな建築を志向するようになった。

② どこの地域にも通用する普遍性を求めることなく、歴史や地域性を重視することによって、日本にだけ通用するような独特のポストモダン建築をつくるようになった。

③ 記号論的な操作を行ったり、様式的な言語の使用をしたりすることはないが、矛盾を含めた多様な要素を包摂するポストモダン建築との連続性を回復するようになった。

④ ポストモダン建築がまとっていた意味論などを徹底的に排除し、地震などの災害に対応し、地域資源を有効に活用するモダニズム建築へと逆戻りするようになった。

⑤ 都市部の開発をおこなうだけではなく、地域の開発や被災地の復興に存在としての価値を求め、伝統的な日本建築を活かしながら、これからの建築を考えるようになった。

問7　この文章の表現に関する説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 35 。

① 3段落の第4文の「軽薄なアップリケのような装飾」は、建築家であるロバート・ヴェンチューリがモダニズム建築を批判するために用いた、明白な象徴のうちの一つである。

② 5段落の第1文の「ただし」は、4段落の後半部分で説明した「歴史主義的・記号論的な建築が勢力を拡大していった」を、5段落では否定することを示す働きがある。

③ 6段落の第5文の「ジャーゴン」は、特殊な集団や職業の専門用語という意味であるが、ここではポストモダン建築の装飾の良さが一般素人には分からないことを示すために用いられた。

④ 8段落の最終文の「いずれにせよ」は、同じ文の前半部分の説明や同段落の第3、4文の説明を考慮したうえで、同段落の内容を結論的に提示しようとすることを示す働きがある。

⑤ 9段落の第5文の「カラフルながらくた」は、ポストモダン建築でなされているデザインが表層的で皮相なものであることを、隠喩表現で示そうとしたものである。

問8　次のa～eの中で、本文の内容に合致するものには①を、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。解答番号は 36 ～ 40 。

a　一九〇〇年代後半に流行を追いかけるような歴史的形態を取り込み、豊かな要素を回復させようと試みたのがロバート・ヴェンチューリであった。その彼の試みは現在では珍しいものではなくなってきている。 36

b　二〇一一年に東日本大震災が起こり、日本の建築は方向性を大きく修正するよう強く求められ、多様性を包摂する方向へ向かった。このような動きは、日本の建築界だけに限定されるものではなく、世界各所でも起こっていた。 37

c　二〇〇〇年代に入り一度消えかけていた、複雑で矛盾を抱え込むポストモダン建築の流れが、今また再び脚光を浴びている。しかし、それは方法論的なことであって、表層的なデザインに関してはモダニズムのままである。 38

d　歴史主義的な建築が勢いを持つようになると、ヨーロッパやアメリカでは批判の声が上がった。しかし、そこで展開された反対にしても、地域性や場所性を受容するという意見や内容のものであった。 39

e　モダニズムへの異議申し立てであったポストモダニズム建築は、一九九〇年代には急速に力を失ってしまった。このようにポストモダン建築とは特定の年代に見られる特殊な建築であると言わざるを得ないものである。 40